# 学長先生から学んだこと

天野　加奈子

十二月二十七日、よく晴れた朝でした。いつものように出勤した私は、同僚の副手から「学園長先生が亡くなられたそうですよ。」と知らされました。「えっ」と思いました。信じられませんでした。きっとだれもがそう思ったのではないでしょうか。冬休みに入り学生もいないせいか、学園内がいつもより静かに感じられました。

私がこの学園に就職させていただく際、ミキ先生に面接をしていただいたときのことです。先生の机の上に栄養ドリンクが五、六本置いてありました。卒業して二年間、学園を離れていたせいか、私の心に残っていた元気なミキ先生とその栄養ドリンクはどうしても結び付かず、少し驚いたのと同時に、お体の調子が悪いのだろうかと思い

ました。

思えば、学生の頃のミキ先生は、まだまだお元気で、入学して間もないころ、チューターの豊後先生から、ミキ先生のお話しがあると知らされ、今でもその情景は、はっきりと覚えています。ミキ先生が教室に入って来られました。そのときのミキ先生に対する豊後先生の丁寧な態度が、私達を大変緊張させました。そして学園の方針を切々と話して下さいました。それ以来、私達にとって先生は、特別な（ちょっと怖い）存在となった気がします。

朝、先生とお会いして服装のことなどで注意を受けたりしますと、ちょっとしたニュースになりました。また、まだ学園が土足でなかったころ、トイレで先生の草鞋を見つけると別のトイレに行ったりとか、今思えば笑ってしまうことばかりですが、当時は、会う度に背筋が伸びる思いでした。

しかし、そのような思い出ばかりでもなく、教育実習を終え、その報告に行ったときのことです。学長室の前で友人とまず学科と名前を大きな声で言うことを確認して、ノックをしました。中に入り無事に教育実習を終えたこととお礼を言うと、先生は「こうして学校に通い教育実習にも行けたことを、ありがたいと思わなくてはなりません。そしてご両親に感謝する気持ちを忘れてはいけません。」とおっしゃいました。高校を卒業して、ほとんどの人は大学へ進学するような昨今、何も感じずに過ごしていた私は、自分がとても良い経験をし、それはとても幸せなことだと気づきました。若い頃から、ご自分の力で勉強されて来られた先生にとって私達のように恵まれた環境で勉強できる事が、あたりまえのことであるはずがありません。このことだけに限らず、何事に関しても、あたりまえということはない、感謝する気持ちを忘れてはいけないのだと教えられたような気がしました。それ以来、周囲の人や物に対する見方が随分、変わってきたように思います。あのとき、ほんの数分でしたが、いつもと違う先

生にお会いできたような気がして、友人と先生の所へ行ってよかったと言いながら帰ったことを思い出しました。

先生が自宅療養されるようになってから調理実習で作ったものを豊後先生から託され、持って行くことがありました。ゼリーやスープ・おはぎなどやわらかいものや先生のお好きなものなどなど。いつもは付添いの方に渡していましたが、時々、おじゃまして、先生が召し上がるのを見せていただくこともありました。おはぎを持って行ったときでしたか、大変お好きだそうで、手に持って召し上がっておられました。あまりおいしそうに召し上がるので、やはりうれしくなり、お届けしてよかったなと思いました。先生は「いつもすみません、豊後先生によろしゅういうて下さい」とおっしゃって下さいました。その言葉を聞くと、何か安心するというか、ホッとしました。また来ますと心の中で言いました。

年が明けて、初めての調理実習の時だったでしょうか、豊後先生が「もう先生の所に持って行ってあげられんね」とおっしゃった時、何か心に一月九日の二七日（ふたなのか）の日にぽっかりと穴があいたような気がしました。お寺さんが「この世の中、常であるということは何もない」とおっしゃったことを思い出しました。私は御仏前で、いつかだれもがこの世を去る日が来るのだから、二度とない人生を大切に一生懸命生きて下さいとミキ先生は教えて下さっているような気がします。